

ダンジョンで快樂を求
めるのは間違っている
だろうか？

咲金

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

いつの間にか不思議な空間で

神に出会う

神から貰ったのは快樂のノアメモリーと雷を操るちから

その力で描く【眷俗の物語（ファミリアミス）】

ダンまちやDグレを愛する人には不快に感じるかもしれません

それが許せる人のみどうぞ

感想はokですが悪口等は受け付けておりません

あらかじめご了承ください

目次

始まる快樂	1
原作開始？年前	12
ダンジョンに出会いを求めるのは間違っ ているだろうか	19
乗りすぎた狼とキレたノア	29
宴の後始末と神々の宴	48

始まる快樂

「ん？どこだここ」

知らない空間

何もない

空気はある？のかな

でも誰もいない

何にも無い

白い白いへや

へやあ、君が選ばれた子か

行きなり声をかけられる

そんなことより

「どういうことだ？」

と言うかだれだ？

〈神と呼ばれる存在だ〉

成る程

「それじゃ選ばれたとは？」

〈儀式さ、君にはダンまちの世界へいつてもらうよ〉

「流石に無能とかはやめろ、何か力を寄越せ」

死亡フラグがたちまくる

ドレクライタツカツテ？ハハハ

取り敢えずフレイアファミリア

のフレイア及びオツタルに変に目をつけられる

原作の謎の芋虫にやられる

芋虫じゃなくても一階で最悪死ぬ

後はヘステイアファミリアに入って

ベルくんの面倒を見るのだけは勘弁兎に角小さい子は苦手だ

それに、そうすれば間違はなく原作崩壊&フレイアさん直行コースまっしぐら

マジで死ぬもうね荒ぶる神さまを食べる世界と同じくらいのフラグがたつよ

日常パートで「エリック上だ！」ナンテ電波受信シタクナイデスヨ

〈なら、そうだなー〉

〈よし、ここの中から選んで

快樂 ジョイド

欲 デザイアス

怒 ラースロ

夢 ロード

絆 ボンドム

色 ラストル

〈この中から〉

「成る程Dグレかなら快樂【ジョイド】を選ぼう」

万物の選択は色々便利そうだし

〈わかった武器は？〉

「どんなのが使える？」

〈色々何処かの赤い竜帝つけるもよし霊をかる剣をもつ黒衣着物の剣士や

「エクスカリバー」とか叫ぶ、あとは落第騎士君みたく「来てくれ陰鉄」とでもさげぶか？」

「結構曖昧だな、ん？待てよ神快樂ってことは万物の選択だよな？」

〈そうだけ〉

「なら伝導体と非伝導体わけられるな？」

〈いけるね、つてまさか〉

「雷系統の武器つてか能力」

ヤバいリアルで刀身伸ばすの出来んじゃないん

ハンターしちやう世界のキ○ア　ゾ○ディツ○出来るじゃん

某少年が跳び跳ねる漫画の忍者みたく「雷切!!」とかやろうと思えばできますやん

とある科○レー○ガ○とか鉄あればいけるよね

ヤバいスゲー

〈ならオリジナルで作つとくよ、そんじやな〉

「ああ、またな」

すると視界がブラックアウトする

〈さてさてどうなるかねー〉

神の道は数百、数千、数万とわかれていく枝のように

だからこそこの他とは違う結末を見てみたいと思う

だがそれは、やはり神のみぞ知る世界と言えるのだろうか

〈見つけたわよ。——さっさとお縄につきなさい〉

〈げっ、やっぱつかないでお前きたの?——〉

〈あんたがまたほかの女神タブラかしたからにきまつてんでしょ〉

〈今日という今日は捕まえてやるこの馬鹿夫〉

〈オー怖い怖いにーげよじゃあねー♪——〉

〈まちなさい(怒)〉

ことうしてとある神の夫婦はおいかけっこを続けるのでした

そしてこちらは

「とりあえずファミリアにはいんねーとなーロキ ファミリア行ってみよ」

ちなみに俺現在18才

今原作何年前？

私、気になります！

おっとこれはだめだアツチの道に踏み込んでしまう

「まだまだ、いくぞアイズ！」

「わかってる」

「誰か戦ってる。」疲れてるときだと話になら無いかもなー「んー、よし！すいませーん」

「誰だ？」

「すいませーんファミ

リア入れてもらえませんか？」

「わかったロキに伝えてくる、それまでアイズ頼む」

「わかった」

「私はアイズ君は？」

「俺はティキミック ティキでもティッキーでも好きによんでくれ」
「ならティキなんできみはここに？」

「ちよつと、ね」

「おい二人ともきてくれ」

「行こ、ティキ」

「わかった」

目の前に無乳女がいるおそらく神だろう

「ん？お前さんが新人りかよつしやよろしゅうなくえくと名前は？」

「テキミツクよろしくロキ」

「んじゃ早速「神の恩恵」を刻もう」

神の恩恵ね大した名前だことで

「なっ?!」

「どうしたロキ？」

あちやー快樂がスキルに出たな

「と、とりあえずほいステータスや」

テキミツク

L.V. 1

力 10

耐久 10

器用 10

敏捷 10

魔力 10

《魔法》

【食蛾（ティーズ）】

全てを食べる蛾を召喚する。蛾は食べるほど成長する。

詠唱—全てを無に帰す黒き剣よ愛よ金よ勇よ我のもとへ降れ、その身を刃と課せ

【鳴神】

雷系統の魔法の派生

詠唱—轟け雷、響け雷鳴

【

《スキル》

【ノアの血】

- ・ノアのメモリーを宿す
- ・特定の条件でメモリーを解放
- ・メモリー解放時【快樂（ジョイド）】が解放

- ・全ての能力の倍加

【快樂（ジョイド）】

- ・【ノアの血】解放と共に発動
- ・【万物の選択】が可能になる
- ・快樂により戦闘狂となる
- ・【ノアの血】が続く限り継続
- ・全ての能力の倍加

【万物の選択】

- ・【快樂（ジョイド）】発動と共に使用可能
- ・万物を選択出来る

【神狩り】

- ・【ノアの血】発動と共に使用可能
- ・神の力を壊す
- ・壊す事でステータス上昇率向上
- ・モンスターでも可

「なつ?!なんだこれはいくらなんでもこれは出過ぎだ」

「凄い . . . 」

「三人とも大丈夫だと思いが他の者には言うなよこれは不味い」

「わかったよロキ、アイズとえくと」

「フィンだ」

「フィンとりあえずこれからよろしく」

まさか神狩りまででるとは

「あ、試験忘れてた」

「おいおい」

「まあいいだろう、これだけのスキル

ただ者じゃないはずだ」

原作開始? 年前

「ハアハアハア」

「まだまだ本気で来なよアイズ」

「……………わかった」

なにをしてるかって? ハハハ現在進行形

でアイズの組手相手をしています

アイズ現在レベル5なのです

つまり原作開始まであとわずかちなみに

ときよりヘファイストスファミリアに顔を出して

【テン】

ヘステイアを見てきたりそちらでも

ヘファイストスがそろそろヘステイアを追い出す的な事を言ってきています

? 何で知ってるかって? ヘステイアの愚痴をヘファイストスにされてるからだよ

【ペス】

ん? ちょっと待ってくださいアイズさん本気で来なよとは言っただけどそれは

【ト】

【テンペスト】のかけ声と共に凄いスピードで突っ込んでくる

HPO になつたら世界から永久退場しちゃう劍の世界のどこぞの閃光さまみたいな感じで

それをなんとか受け流し体当たりでアイズを吹っ飛ばす

すると今度は手数でこちらを崩しにきてるので

劍の部分におもいつきり電気を流す

劍は鉄後は刃じやない部分をアイズに当てれば

「つつー！」

電気がアイズに流れる

ちなみに静電気レベルだ

その静電気に痺れてるあいだに

劍の刃先を掴まんで抜き取る

静電気で痺れてるので手には力が入らないから

簡単にとれる

ちなみにアイズの剣はデュランダル（剣が壊れない追加属性?的なもの）
がついてるので壊れない切れ味は落ちるが

「あつぶな、アイズ本気で来なよとは言ったがそこまでするな最悪死ぬからね俺」

「訓練してるときに考え事をするのが悪い」

「すいませんアイズさん」

「わかればいい」

待ってください俺アイズより歳上だよね?!

何で怒られてんの?何でさん付けシタノ?

あ、そうそう何で前回レベル1の俺が5のアイズの

相手をできていたのか?と言うと現在俺レベル7

何でこうなったかって?!

ハハハ初めてダンジョンに行ったら

まずなにと戦ったと思う?

ゼノスの大群だよ大群しかもゼノス大切なので二回言いました

まあ、そんなときは死ぬかもって思ったら何かノアの血

が発動してそつからは一方的相手の攻撃は聞かない

しかしこちらはきくしかも魔石だけを選択してそれを取り出せば

それで完了相手は死ぬ

それで帰ってロキに見てもらったたらランクアップだ

もうね頭真つ白になったよ

1ヶ月とかならまだわかるそれが1日よ1日

ロキに質問されて答えたら

もうね肩つかまれて前後に振るもんだから頭痛くなるし

でその二ヶ月後ハハハモンスターレックスが

ピンポイントで俺の目の前なら良かったハハハ

真横から出てきて吹っ飛ばされて

頭から血は出るし左腕は折れるし踏んだり蹴ったり

もうキレて頭の感覚が無くなるまで魔法うちまくったあとに

魔石取り出して意識が途切れた

そしてそのあとだアイズとフィンが見つ付けてくれた

ちなみに自分が認識した相手じゃないときわれないので

そこでいったん起こしてもらってから

フィンを認識触れるようになってファミリアに帰った

ちなみにそれでランクアップした2ヶ月で

次のランク所か2から4だ

モンスターレックス中でもレベル2が

ソロで相手するレベルでは無かったからだ

そして1ヶ月外出禁止命令が出された。当たり前か

ちなみにノアの血の条件は

何かに勝ちたい

何かを守りたい

何かに殺されそう

と言った何かにという曖昧な感じではあるものの

簡単に発動出来るものだった

ちなみに意識が途切れたりすると自動的に発動する
なのでダンジョンで寝ることも結構ある

以前それをアマゾネス姉妹の

ティオネとティオナそしてツンデレウエアウルフのベートローガに

『あり得ない、絶対おかしい、頭とか』と声を揃えてのツツコミが

入ったその場にいたロキやフィン、アイズに頷かれるしまつ泣いていい？

ちなみにベートはツンデレでなにげ優しいただ思った

男のツンデレって誰得？と

とにかくそんなこんなで現在レベル7デスヨハハハ笑えね

「さてとアイズこんぐらいにして戻るぞ多分そろっと」

「いつまで訓練してるつもりだもう7時だぞ」

「お母さんが来ると思ってたけど遅かったか」

「母さん…確かに」

「誰が母さんだ！誰が！子供ができた覚えは無いし

そもそも私は未婚だ」

「生き遅れの？」

「……の?」

「よし、お前たち少し教育してやろう」

やべ笑顔で筋肉がひくついている

これを、青筋が立つというのか

とか考えてる場合じゃねー死ぬ死ぬ死ぬって

アイズ逃げんおいギャーこつちきた

「すいません、すいません、すいません」

テイキミックは量膝を地面に付け

手を前に揃える。土下座だ

「許さん(怒)」

こうして原作開始前のささやかな日常は過ぎていった

あ、原作開始したからって特に俺は変わらんよ(笑)

その30分後目が覚めるテイキミックであった

ダンジョンに出会いを求めるのは間違っているだろうか

『ヴヴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオッ!』

「ほあああああああああああああああああつ!？」

「……………」

いま白い髪の毛の少年がミノタウロスに

おっかけられていた

この辺りで狩りをしていたということは…レベル1

「不味いな…アイズツ!来てくれ!」

「ん、さっきの子助けにいくの?」

「ああ、観たところレベル1流石にな

うちの不始末のせいでもある」

「わかった」

そしてさっきの少年を追いかける

「いた！」

行き止まりで震えている

さっきの少年と

少年に今にも飛び掛かろうと

荒い鼻息をたてるミノタウロスの

姿があった

まさに絶体絶命

「ティーズッ！」

え？ 詠唱はどうしたって？

発動状態で保ってただけです

「食い千切れ」

瞬間ミノタウロスの足が食い千切られる

そのまま前に倒れるミノタウロスを

アイズが細切れにする

そしてミノタウロスは四散

「……大丈夫ですか？」

ミノタウロスの血が少年の頭に

シャワーのように降りかかる

「あちやーゴメンなー少年

もう少し早ければ怖い思い

させないように済んだんだけど」

「……………(……………あ)」

返事がない

「あの……大丈夫、ですか？」

「少年ー大丈夫かい？」

「おーい、おーい」

あれ？いま神の音が

「とりあえず戻ろう」

「わかった」

一方血塗れでギルドにきて

窓口受付嬢のエイナ・チュールこと

エイナさんにお説教されたあとのこと

「それで……アイズ・ヴァレンシユタイン氏、の情報だっけ？どうしてまた？」

「えっと、その……」

一部始終を伝えるベル

ミノタウロスとエンカウント

逃げて壁際まで追い詰められていた所に

謎の蛾が翔んできて

ミノタウロスの足を食べたと

思っただらいきなり

ミノタウロスに一筋の

光が走りミノタウロスが倒されて

その時に頭から血を盛大に被ったこと

そしてそこでアイズ・ヴァレンシユタイン

に助けられてたことに気付いて

手を差し出してきたアイズに

びつくりしてにげてきたこと

「はぁーどうして君は言い付けを守らないかな 怒」

笑顔でこめかみがピクピクうごいているエイナさん

美女エルフの面影が崩れている

「は、はいいい！」

「それで、蛾とアイズ・ヴァレンシユタイン氏に助けられたと」

「はい」

「間違い無くロキファミアリアの

劍姫アイズヴァアレンシユタイン氏と

ジョイドテキミツク公だねそれは」

「ジョイド？テキミツク？」

「知らないのかい？ベル君は

ジョイド、快樂の二つ名を持つ

テキミツク公

アイズヴァアレンシユタイン氏の

後にロキファミアリアに

入団したにも関わらず

ここでも、二人しかいない

レベル7の内の1人になった人物で

入団して初めてダンジョンに

入った時にレベル2に上がるとい

歴史的快挙を成し遂げた人さ」

「初めてっ?!」

「うん、何でも君みたいに1人で入って

大群に襲われてそれでも

全部倒してそうだったらしい

その事をギルドの人が聞いたんだって」

「それで…」

「そしたらティキミック公は

こう言ったんだって」

『今自分が生きてるのは

モンスターと戦う力をくれた

主神ロキのおかげ

もし、持ってなかったら

力をロキがくれてなかったら

間違い無く自分は彼処で

モンスターのお餌になっていただろう

特に自分はスキルのお陰で生きてる

っていつでもいい、だから』

『レベル1の駆け出し冒険者に伝えてくれ

冒険者は冒険してはいけない

命を粗末にして神を悲しませてはいけない

どんな人や神様でも人の死は辛いものだから』

「そういつたらしいんだ」

「じゃあエイナさんのアレは」

「そう、ティキミック公の言葉なの」

その言葉を聞いたベルは自分が

主神ヘスティアを悲しませてしまう

行動を取ってしまった事に気がついた

「だから、冒険者は冒険してはいけない」

「そう、そして悲しむのは私も同じ」

「えっ？、なんでエイナさんが」

「自分の担当していた人がモンスターに殺される」

「っ！」

「そんなのもう起こってほしくないから、ね」

「わかりました、エイナさん」

「うん、良かったよ無事で」

「エイナさん大好き!!」

「うええ!?!」

「バイバイエイナさんっ」

ここうしてまた新たに記録が紡がれていくのだった

乗りすぎた狼とキレたノア

『……おい』

『おお、えれえ上玉ッ』

『ぼっ、馬鹿ッ、ちげえよ。エンブレム見ろ』

『げっ』

そんなやり取りかが聞こえてくる

「うーん、アイズもう少し静かにならないかな？」

「……無理」

「さいですか」

「アツイズー」

そういつて飛び付いてきたのは

アマゾネスのティオネとティオナ

「二人ともアイズさんが」

「大丈夫レフィーヤ」

「そうですか？」

「おーい四人ともそろつと始まるよ」

静かにしないとお母さん（リヴェリア）から

雷が落ちるからねー

「よっしゃあ、ダンジョン遠征みんなごくろうさん！今日は宴や！飲めえ!!」

そして、飲み初めて少したったころ

「そうだ、アイズーティキ！お前らあの話聞かせてやれよ」

「あの話？……」

嫌な予感しかしないアイズと俺しか知らない

話なんて、……ミノタウロスか

ならとめないとさつきチラツとだけど件の少年が

間違いなく居た。

「ミノタウロスの話なら、笑い話じゃないから

この場で言うつもりは、ないよ、ベート」
少しかだけ殺気が出てしまう

「「ツ!?!」」

おっと他の人にも伝わったか

「あん?、何でだよ」

「人一人の命が無くなりかけたんだ

笑い話じゃないだろう原因は俺らにあるし」

流石に死にかけて話をするのはダメだ

本人がいるならなおさら

「別にいいだろ

ミノタウロスに追いかけられてるガキがいてよ

それもひよろくせーガキが」

やめろ

「そんですぐに壁に追い込まれて震えてんの」

やめろやめろ

「その冒険者はどうしたん? 助かったん?」

ロキが聞く

「テイキが間一髪で足消して私がミノを細切れにした」

代わりにアイズが答える

「そんで、あのくっせー牛の血を全身に浴びてよー」

「うわあ」

レフィーヤか？

やめろやめろやめろ

「真つ赤なトマトによ！くくくつ、ひーっ腹いて」

「ふふふ、……ご、ごめんなさい、流石に我慢できない」

アマゾネス

やめろやめろやめろやめろやめろ

「ホントザマアねーよ。あの雑魚なあアイズ」

【雑魚】と【アイズ】の単語がベートの

口から出た瞬間

ブチッ

ホントにそんな音が聞こえたがどうかかわからない

しかし、次の瞬間

「よし、ならベート・ローガここで冒険者やめろ」

ベートの首を鷲掴みにするティキミックの姿があつた

「「つつつつ!!」」

「ちよ、ティキ」

「流石にそれは」

「不味いよ」

声を揃えるアマゾネスの姉妹

しかし、

「ベート、俺は、笑い話でも酒の肴にする話でも無いといつた

他の笑つてた奴らもだ、命が消えかけたんだ

そんなに笑いたきやその話で笑えばいい、そのかわり

その話のあとでそいつら全員、

シンゾウエグリトツテ殺ルヨ」

殺気をこめて目が笑つてない笑顔で言う

「ここでキレないと

あの時のあの人が報われないから

「ついでに2ついつとく」

一つ目、もしここに本人がいたらどう思うか

二つ目、笑ってるてめえらも俺からしてみりや雑魚に代わりない」

そう、雑魚だ。なんて言っただって手をつ突っ込んで

心臓を握り潰せばそれでおしまい

あのカドモスもこれで十秒とかからない

ダンジョンにいる生き物はみな核となるもの心臓【魔石】

を持つているのだから

「なっ?!」

ティオナ

「なんだってえー!?!」

ティオネ

「っ!?!」

レフィーヤ

かな?

口々に言い返してくる

「そうかそんなに気に食わねえか

なら一撃でも入れてみる俺に」

その言葉を皮切りにアマゾネスの姉妹や、笑ってた面々が殴りかかってくる
レフィーヤもバカにされたのに堪えたのか簡単な魔法を射ってくるしかし

「あ、あれ？」

「なんで？」

「当たらない？」

「お前ら俺のスキル知らないもんな

基本ティーズしか使ってなかったし」

「なんだって言うのよ」

「万物の選択」

「「は？」」

怒りはどこえやら変な声を返してきた

「それがなんだってのよ」

「わかんない？ 例えば」

そういつてベートの心臓がある部分にふれる

「こうやって手を突っ込んで」

そのまま手を突っ込んでいく

「このまま心臓を握り潰せるわけだ」

その言葉に騒いだ一同は顔を青くする

当たり前だ「お前たちなら片腕ですぐに殺せる」

と、言われているのだから

「そして、俺には俺が選んだ物しか触れられない

つまり俺はダンジョンじゃぜったい死なないんだよ」

「「そんなことっ」「」

「あるんだよ、目の前で見たことも信じられんか？それでベート雑魚が

ダレダツテ？うん？さあ早くキッチンと言わないと

シンゾウツブレルヨ」

「ひっ！お、俺が悪かった。ぎ、雑魚は俺だ。

認める認めるから命だけは」

「今回は、酒の勢いもあつたから許す。だがな

その少年はこんな状況で命乞いが許されない。

そんな状態だったんだ、それを片時も忘れるな。

他の奴らもだ、ロキファミアのエンブレムに泥を塗りすぎる

ような事はすんじやねーいいな、特にテイオナ、テイオネ

お前ら第一級だろ。命の大切さをよく知ってる奴らが

他人の命で笑ってんじやねーよ。

アイズも困ってただろうが

もし、文句があるなら死合してやる

ただし体の何処かティーズに食われるか

心臓抉られる覚悟を持ってだがな」

なにもしやべんねーな

空気も重い

「返事は？」

「「「は、はいっ！」「」」

「アイズにも謝っつけ」

アイズにも迷惑かけたしな

「も一つ、ここにその少年が居るのだが

その少年に聞こえる声で、周りの店に迷惑がからない

音量で、謝罪。いいよなミアさん」

「はあー、いいよ」

「店主の許可も取れた」

「「どこにいるかわからないけどすいませんでした」「」

「よし、よく言ったお疲れ様。

ビビらせて悪かったな、個々は俺が持つよ

この量で足りるぶんなら」

さつきまでの殺意はどこえやら

不思議なふくろの中から金を出す

その総額一億ヴァリス

「俺は他の人に謝ってくるから」

そう言つて俺は去る

居心地が悪いから

「他の人に謝ってくるから」

そう言つて彼は去つていった

昔からそうだ彼は命のことになると

本気で、どんなときでも一生懸命

どうにかしようとする

そして、命を粗末に扱おうとすれば彼の逆鱗に

触れることになるのは確定いや、彼の場合は

逆粉かな？ 蛾だし。

「こ、怖かつたー」

「な、何であんなに」

「そっだよ、アイズ知ってる？」

「知らない、リヴェリアは？」

「彼奴がレベル1のとき

初めてダンジョンに潜った日モンスターの大群に襲われたらしくてな」

「それって」

「今回の」

「そうだな、しかし彼奴にはスキルがあった

さつき言ったあれだ。そして1日でランクアップした」

「「はあ？」」

「一同こぞって声をあげる

当たり前だ。最高が私の一年それを

楽々越えてしまったのだから

「それホント？リヴェリア」

「驚愕の真実に私は聞いてしまった

リヴェリアが嘘をつくような人では無いのに

「事実だ。そしてその時」

「その時？」

「似たようにウーシャドウに襲われて命を落とした

冒険者を見たらしい」

そうか、それで命に人一倍…あれ？

今までにも死を私達はみてきた

けど何でその時だけ？

「そして、服のエンブレムで

その所属ファミリアに行ったらしいそしたら」

「そしたら？」

「感謝されたらしい…本人は不本意だったらしいが」

「え?!」

「なぜ？」

「本当は、何か言つて欲しかったのだろう

自分の目の前で死んでしまった。

それを、彼奴は自分が殺してしまった。

に置き換えてしまったのだろうか」

それは、きっと私達でもそう思ってしまうだろう

「それで」

「そっか、それを私達は笑ってたような物だもんね」

「うん」

「後で謝っておけよ特に」

ベート、ティオネ、ティオナ、レファイヤ

お前らは、常日頃彼奴に助けてもらっているからな

見放されたら、不味いぞ」

確かに私達は日頃彼に助けられている

「「「!!!」」」

彼の魔法の蛾は武器にも盾にもなる

それに私達は何度も何度も助けられた

「注意したと言ったことは、まだ見放されてはいないからな

仏の顔もなんとやらだ」

「うん、そうだね」

「やあ、すこしご一緒してもいいかな？少年」

そして少年に話しかける

「あ、は、はい、どうぞ」

いきなりで驚いたのだろう

「ん、ありがとう少年」

「あつ、あの「さつきは悪かった少年」え？」

「ホントはもっと早く止められれば良かったのだけど」

「い、いえ」

「いや、他所のファミリアの人を侮辱したんだ

何されたって此方は可笑しくないんだ

ホントにすまなかった」

「ホントにいいんです止めてくれただけでも」

「そうか、ありがとう、ありがとう少年」

「代わりといっってはなんだが、これを受け取ってくれ」

そう言つて一億ヴァリスをわたす

「こ、こんなになん!?これは、流石に」

「いや、せめて此ぐらいはさせてくれ頼む少年」

「わかりました。顔を上げてください」

もうすこしだけ、何か食べませんか？」

本当に優しいなこの少年は

助けられて良かった

「少年・・・ああ、わかった」

そうして二人で飲み食いをした

その光景をみつめる少女がいた

「テイキ、その少年に謝ってた」

「なんで、」

「テイキが」

「そうですよ、アイズさん」

「ゴメンで、早く止められなくてゴメンっ！て

一億ヴァリスと一緒に」

「そんなに?!」

「うん、私達が直接言いに行くわけにいかないから

お客様全員に謝るのをいいにして

違和感が出来るだけ無いように近くに行って謝ってた」

きつと怖い思いをさせてしまった人へ

ミノタウロスに追いかけられて

怖い思いをさせてしまった少年

命の話でキレて

怖い思いをさせてしまった仲間

その2つの罪滅ぼしのためだろう

本当に彼らしい

「そっか、私達が直接言いに行ったら」

「彼がその人物と言ってるようなもの」

「それでは、彼が可哀想だから」

「私達の代わりに直接言いに行った」

「敵わんな。本当に」

「うん」

本当に敵わない優しすぎる

彼に

こうして宴の夜は過ぎていった

宴の後始末と神々の宴

現在正午前

何時もならダンジョンなのだが

団長、アイズ、リヴェリア、レフイーヤ、アマゾネス姉妹、ベート（ツンデレモード）
に止められてしまった

理由は……「「「「「二日酔い（だろ・でしょ）」」」」」
と言われたから

しかも朝起きたら……「は？」

リアルでこんな間抜けな声出せるの？ レベルの
間抜け声をあげてしまったなげなら

部屋を出た瞬間目に入ってきた光景は
ベート、アマゾネス姉妹、レフイーヤという

うちの主力組が D O G E Z A をしている
というスゴく奇妙な光景があったから

その理由を聞けば

「昨日はごめん（悪かった、なさい）」

とエルフ、犬、アマゾネスが同時に謝る始末

怒つてない事を伝えた瞬間

死んだ?!と思うほどに

瞬間的に寝てしまった

リヴェリアが言うには

「朝5時に起きてずつとアレだったらしい」

なるほど、そらそうなるわけだ。と

呆れてしまったのはナイシヨ

そして現在いるところは豊穰の女主人

昨日宴をしたところだ

「ごめん、ミアさんいるー?」

「ティツキーかニヤ」

「期待して損したニヤ」

「よし、喧嘩かってやるよ」

「何してるんですか、貴方は」

呆れた口調で話してくるエルフ

リユー・リオン

説明は原作で（作者メタい）

「いやいや、ミアさん待つてただけ」

理由は昨日の事を謝りにきた

ただそれだけだ

「ん？なんだいなんたかい」

「ああ、昨日は悪かったなミアさん」

「構わんさ、ま、あの時誰か止めなかったら」

「止めなかったら？」

「久しぶりにアタシの得物が轟き叫ぶところだったよ」

うん、笑えないめちやくちや笑えない

俺には効かないが他のやつらは

致命傷物だ

「さつきもあの坊主が来てね」

「へーどうして」

「これを返しておいてくれだつてさ」

そう言つてかざしたのは一億ヴァリスだつた

「それつてあの少年にやつたやつか」

「みたいだね、どうする？」

「といつてもそんなにいらんのよねー」

「へーそれまた何でだい」

「俺には消耗品なんて無いんでね」

「そうか、昨日やつたあのドツキリかい」

ドツキリとはまあ、昨日ベートにした

アレのことだろう

「まあーねーそれで武器も防具も傷つかないから回復薬も

俺には要らんのよ」

「じゃーどうやってそんなに稼いだんだい？」

「カドモス何匹も狩つてればねー」

「なるほど、あんた最高なん層だい？」

「層？ ああ最高到達層？」

「そうだよ」

「百」

「は？」

「だから百」

「ソロでかい？」

「そそ、俺の力ってダンジョンにも使えてね」

「そのまま下に落ちれば簡単につくんだよ」

「そう簡単につくそれこそ友達の家行つてきまーす

とか言えるレベルで行ける

「あんたつてやつはホントに規格外も良いところだよ」

「呆れたようにいわれる」「呆れてんだよ」

「心読まれた」

「顔に出てるよまつたく」

「ははは、照れるね〜」

「まあ、良いけどねさつきも坊主に言ったが」

「ん？」

「ん？」

「へまして死ぬんじゃないよ」

「ん、サンキューミアさん」

本当に敵わないこの人には

この人ほど凄い人は居ないだろう

時は変わって現在神の宴

ナレーションは天の声から

(作者だろっ)

野暮な突っ込みはなしで

そして、神の宴の席で一人？いや一神

タツパーに宴の料理を踏み台を利用してつめる

姿があつた名はそう

処女神ヘステイア

ロリ巨乳だ

もう一度言おうロリ巨乳だ

「俺がガネーシャである！」

嫌いその男神

「俺がガネーシャである！」

「あーもううるせー黙ってろ

ガネーシャ嫌いんだよ」

気を取り直して

そこに近づく三つの影があつた

一つ目は鍛冶の女神ヘファイストス

二つ目は美の女神フレイヤ

三つ目は貧乳女神ロキ

「貧乳言うな！ 怒」

おっと神にはバレバレか

おや？ どうやらヴァレンシユタインとテイキミックの話

しているようだ

「ここからはナレーションが無くなります」

「ねえ、ロキ。君の【ファミアリア】のヴァレン何某とテイキミックについて聞きたいのだけど」

「あつ、【剣姫】と【快樂】ね。私も聞きたいわね」

「ううん？ドチビがうちに願いたい事なんて、明日は

隕石の雨でも降るんとちゃうか？

ハルマゲドーン！

ラグナロク！

みたいな感じで」

「聞くよ、噂の【剣姫】には付き合っているような
伴侶や男はいないのかい？」

「あほお、アイズはうちのお気に入りや。

嫁には絶対出さんし、誰にもやらん

まあ、一人だけうちの「ファミア」の
なかに許せるやつはいるが、それ以外は
八つ裂き確定や。」

「そうかい！」

「なんでうれしそうなのよ」

「ところでその一人だけってのは、誰なの？ ロキ」

「さつきも出てきた【快樂】のティツキーや」

「「ティツキー？」」

「ティキミツクのあだ名やあだ名」

「それで、その【快樂】とか言うのの話も聞きたいんだけど」

「なんや、ティツキーのこと知らんのかい」

ホンマドチビはバカやなー」

「なんだとおー」

「いや、それはロキが正しいわ」

「ヘファイストスまでえー」

「「だつてオラリオで唯一二人のレベル7冒険者の

うち一人の事を知らないって言ってるのよ貴方は！（言ってるんやで、ドチビ！）」

「うっ」

「まあ、ええわそんでティツキーのことやな」

「ええ」

「ここに要るから悪いんやけどこのオラリオいや世界最強や」

「なっ?!」

「へえーロキ貴方はうちのレベル7より貴方の「ファミリア」の

レベル7の冒険者のほうが強いと断言するの？」

「ああ、彼奴を殺せるのはこの世界にはおらんよ」

「?!?!」

「お、珍しくフレイヤの驚く顔が見れた」

「ロロロロ、ロキ君は何を言ってるのかわかってるのかい？」

「わかっとなるよドチビ。そもそも彼奴は彼奴が認めたやつしか

触れることすら出来んからな」

「!?!」

「なるほど、透けたりするスキルの持ち主かしら？」

「正解や正確には【万物の選択】とか言う

チートスキルや」

「なんだいそれは」

「なるほど、確かにロキのその【万物の選択】が

言葉通りなら恐ろしいスキルね」

「お、フェイたんはもう気がついたか

まあ、他にもチートやけどな」

「それって、」

「簡単や、神の力が彼奴には効かんのよ」

「「なっ?!」」

「そんなことあり得るのかい？」

「事実やで」

その言葉の先にあつたのは

ただ、ただ、静かな風の音のみだった